

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第25号

空中回廊

この企画展は解説不要[サイクルとリサイクル展] / 会員のひろば
/ 愛知県美術館コレクションから[古賀春江の《夏山》とクレイ、
そしてルソー?] / 愛知県美術館より / 友の会活動紹介



○この企画展は解説不要○

サイクルとリサイクル展

2007年9月7日(金) から 11月4日(日) まで開催

愛知県美術館では9月7日から、「サイクルとリサイクル—めぐりめぐる形とイメージ」と題して現代美術展が開催されています。

.....「リサイクル」って?.....

私はこのタイトルを聞いて、ゴミやガラクタを使った、いわゆる「リサイクルアート」の作品展を想像していました。そのような作品も一部、展示されていますが、どうやら、そんな単純な趣旨の展覧会ではなさそうです。

私たちが日常生活で使う「リサイクル」（資源の回収・再利用）という単語は、いわゆる現代用語であって、一昔前の辞書にはこの意味では載っていません。今回の企画展でいう「サイクル」とは、「循環」であって、それが繰り返されること（原義の）「リサイクル」（＝再循環）である、という考え方のようです。ところで、「リサイクルアート」は、資源を再利用していますが、作品になった段階が「最終形態」です。その後で原料に戻されるという「循環」はしていないので、その意味では、「リユース（再利用）アート」と呼ぶほうが正確でしょう。

.....「循環」を感じる.....

では、この企画展では、どんな「循環」を感じられるのでしょうか。一例ですが写真①②の



①

大巻伸嗣《Echoes-Infinity》制作過程



②

大巻伸嗣《Echoes-Infinity》2005年

作品は、ステンシルのような型を使って展示室に顔料の粉を撒くことで、床一面に花の模様を「生成」させたものです。ところがこの作品は、そこに鑑賞者が立ち入ることができるので、顔料を床の上に乗せただけの方法で描かれた花は、次第に乱され、ついには「消滅」してしまいます。するとそこに、再び模様が描き加えられ、花の模様が「生成」されるのです。この「生成」と「消滅」という対立する2つの概念を往来することが「循環」すなわち「サイクル」であり、これが繰り返されることで、私たちは「リサイクル」を体感することになるのです。

別の作品（写真③）は、飛行機とその影を一体化させた彫刻です。飛行機という「実体」とその「影」という実体のない存在との概念が交錯しています。もうひとつの考え方として、「実体のない」影を、金属という「実体」で構成したのだと解釈することもできます。

この企画展では、このほかに、「見えるもの」と「見えないもの」、「オリジナル」と「コピー」、「過去」と「現在」といった対立する概念の循環を感じることができます。

「解説不要」

さて、ここまでは作品のことをわかったフリをして蘊蓄をたれてみましたが、じつは現代美術には解説は必要ないというのが私の持論です。それは私が、現代美術とは「ワケの分からなさ」を楽しむものだ、と考えているからです。

近代以前の美術作品は、二次元の「絵画」であれ、三次元の「像」であれ、「見るからに美術品」という体裁をしています。日常生活からは一線を画した、ちょっと高い境地にいて、すぐには親しくしてくれない雰囲気醸し出しています。鑑賞している私に、「お前にはこれが



③ 篠原猛史《真っ直ぐな曲線》2003年

理解できるかな？」と試してくる上司や先生のような存在です。

それに対し現代美術の作品は、なぜこれが「美術作品」なのか容易に理解できず、ワケが分からない作品も多くあります。でも、日常生活と同じレベルにいて、「ワケの分からない」ことをきっかけに脳が活性化され、「きみはこういうことが言いたいのか？」と問いかけることで親しくなっていける友達のような存在です。第三者から、「彼／彼女はこういう奴だ。」と聞かされるより、直接話したほうが理解も進み、親しくなれます。

というわけで、解説はそこそこにして自分の美術観（「ワケの分からなさ」は現代美術なみ？）を語ってしまいました。みなさんも、私の作品解説を真に受けてないで、自分なりの解釈を見つけにってください。美術館に急げっ！
注・作品と親しくなっても、連れて帰ってきてはいけません。

※記事は本展覧会を担当される拜戸主任学芸員へのインタビューを参考に構成しました。（森）

次回展覧会 ロートレック展 パリ、美しき時代を生きて

11月13日(火)～
2008年1月14日(月・祝)

ロートレックの画集を眺めると、男性より女性を描いた作品のほうが圧倒的に上手いことに気づく。中でも《黒いボアの女》は特に魅力的な作品である。白い化粧顔の奥の大きな瞳は、我々の心を射抜くように鋭く輝いている。また素早いタッチを重ねるように描かれた黒いドレスと当時流行した黒いボアは、この女性の一筋縄ではいかないような妖しい色気を際立たせている。モデルとなったこの女性が誰であるかは不明だが、自身を他人の視線にさらすモデルになることに慣れているような堂々とした物腰と表情から、プロの女性（娼婦）と考えられてきた。

この作品のように人物の特徴を最大限に引き出すために、ロートレックは、はっとするほど刺激的な描写や構図を常に用意する。また油彩でボール紙のような厚紙に描くことが多いが、塗り残しの部分を残したまま完成とする。塗り残しの部分は、画家に手を加えられることを待っているようであり、そのため作品は常に現在進行形で生き続けているような印象を与える。この手法とモデルとなった女性の複雑な魅力が高度に結びつくロートレックの美学は、きわめて現代的であり、我々の眼にも新鮮さを失うことはない。

今回の「ロートレック展 パリ、美しき時代を生きて」では、ロートレックが描いた人物や、そうした人々が生きた19世紀末の歓楽街モンマルトルに焦点を当てる。1世紀以上も前のこの時代をノスタルジックに回想するだけでなく、ロートレックの芸術の中に、過去と現代の交差が実感できるはずである。

（学芸員 森 美樹）



○会員のひろば○

友の会新会長挨拶／友の会事業活動紹介 特別鑑賞会／ナイトカフェ

◎ごあいさつ「青い鳥を探しに…」 友の会会長 太田幸一

5月の通常総会と、その後の役員会で会長に選任されました。改めて申し上げるまでもなく宮崎前会長に比べ、おおいに力不足です。しかし幸いなことに、ほとんどの役員の方々に留任していただいたうえに、新任の役員の方々にも加わっていただきました。入会して良かったと思える「友の会」を目指して、微力ですが、尽力いたしますので、皆さんの積極的な活動参加をお願い申し上げます。



正直なところ、美術に対する関心は、外野席以外の何物でもありません。美術に限らず、生来の好奇心ゆえに、映画、演劇、音楽など何にでも興味を持っていますが、いずれも野次馬としてでしかありません。気楽さはあるですが、少々、みつともないと考えています。

好奇心のエネルギー源は、ワクワクドキドキしたいからにはほかなりません。ただ、残念なことにワクワクドキドキ感を味わえるのは、どのジャンルに限らず、滅多にあるものでありません。自らの鑑賞眼、もしくは感性に起因することですから、これはこれで致し方ありません。要するに年齢を重ねても、懲りずに青い鳥を探し求めているようなものです。青い鳥がいたら教えていただけませんか。そして、一緒に探しに行きませんか。

◎友の会事業活動紹介（会報編集担当）

皆さんがご覧になっているこの友の会会報「空中回廊」は、会員で構成する編集スタッフが制作しています。会報は、友の会会員の皆さんはもちろん、将来の会員候補である美術館来訪者も対象とし、友の会活動と共に美術館広報支援として美術館活動も紹介しています。

春・秋の年2回発行し、これに合わせ4ヶ月程前から活動を開始します。編集会議で紙面構成案をまとめ役員会で承認を受けた後、掲載する企画展の担当学芸員をインタビューしたりイベントや講座に参加したりして原稿をまとめます。スタッフ以外の方にも原稿を依頼します。会員の方が撮影してくださったイベントなどの写真も重要な原稿のひとつです。原稿が揃った段階で編集に入り、編集スタッフの中でデザインや校正を分担して、何度も校正、修正を重ね



ていきます。編集段階は時間が限られるため、平日夜の活動もしばしばです。こうしてできあがったものを印刷会社に渡し、完成を待ちます。

会報「空中回廊」が、皆さんが愛知県美術館や友の会を知る手段として一番楽しく分かりやすいものになればと考えています。

（会報編集担当理事 水野・平松）

◎「若冲と江戸絵画」展の特別鑑賞会に参加して「特別鑑賞会」。それは一般の入場者が少ない午前中や閉館後の美術館で、学芸員と一緒に鑑賞できる、友の会会員の大きな特典です。

今回は深山学芸員から解説を受けた後、展覧会場へ行きましたら、なんとそこにジョー・プライスご夫妻がいらっしやって、感激しました。主な作品の前で悦子夫人が収集にまつわる貴重



解説する悦子夫人(左から4人目)



なお話をしてくださり、プライス氏は穏やかな表情でその様子を眺めていらっしやいました。鑑賞後、会員ひとりひとりに図録へのサインや握手をして頂き、友の会ならではの嬉しい時間を過ごすことができました。「特別鑑賞会」皆さんもぜひ参加してください。

(友の会会員 武藤)

◎ナイトカフェ 今年も大好評

好評のナイトカフェが今年も8月の金曜の夜に4回開催されました。第1週目はオカリナとピアノのデュオにパーカッションが参加して、オリジナル曲を中心にジャズ、クラシックなどが演奏されました。時折中庭から聞こえる蝉時雨が夏らしいハーモニーを奏でていました。

参加した皆さんはお好みの飲み物を片手に、時々手拍子も入るノリノリの様子で、リラックス



↑第2週：アコーディオン演奏



した楽しい雰囲気でした。

ナイトカフェは会員のサポートによって成り立っています。企画やメニューを考えたり、会場の準備から飲み物や軽食の配膳、ステージの照明など役割は様々です。参加される方も含めて大勢の協力で3年目のナイトカフェも大成功でした。

(折戸)

←第1週：オカリナとピアノのデュオ

○愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる○

古賀春江の《夏山》とクレー、そしてルソー？

もこもこと重なる緑の山並みに、案山子のような姿の登山者たち。窓の無い小屋やテントのほか、なぜか牛や日の丸の旗、気球なども描かれています。みな山に比べて大きく、子供が描いた絵のようです。古賀春江（1895-1933）が1927年に描いた《夏山》は、展示の機会が多い作品ですが、私にとっては何度見ても飽きないだけでなく、謎に満ちた絵です。

福岡県の寺に生まれた古賀は17歳で上京し、穏やかな水彩画や竹久夢二風の絵を描いていましたが、26歳の1921年頃から新興美術への興味を高め、その後十年余りの短い生涯をキュビズムやシュルレアリスムといった前衛絵画に傾けました。1926年から29年にかけてはクレーの影響を強く受けており、クレー作品の図版を模写したスケッチも遺っています。《夏山》の牛や国旗、魚の骨のような木については、1993年開催の「パウル・クレーの芸術」展カタログで寺門臨太郎学芸員（現・筑波大学大学院准教授）が、クレーの《スイスの風景》（1919年）が源泉だと突き止め



参考図版 パウル・クレー《スイスの風景》1919年

ています。平面的な図形としての山の重なり方もクレーによるものでしょうし、三角形の顔と帽子や小屋の陰影は当館のクレー《女の館》などと共通しています。山の側面に付けられた階段も、クレー作品によくある梯子の翻案かもしれません。

他方で、この絵の気球は当時のモダンな現代文明を象徴しており、それと素朴で平和な土着的世

界が共存しているという解釈もなされています。1929年からの古賀は商業美術や科学雑誌などのイメージに接近し、この年の《海》や翌30年の《窓外の化粧》では飛行船や鉄塔、内部構造を見せる工場や潜水艦などが描かれています。私の目に映る《夏山》の気球はあまりにのどかであり、また、他の時期の古賀作品にはこのような童心が感じられないという違和感も覚えていました。長年のこの疑問を少し溶かしてくれたのが、「ルソーの見た夢、ルソーに見る夢」展です。日本の美術作品にこれほどルソーが潜んでいたのかと驚かされましたが、1920年代は日本でのルソー紹介が盛んとなり、春陽会などでルソー風の作品が多く現れた時期でした。ルソーに関する古賀の発言や模写などは無いようですが、1926年「造形」第1回に出品された岡本唐貴《丘の上の二人の女》を古賀は「ルッソウの『アポリネイルとミュージ』を想起する」と評しています。《夏山》の気球や印象的な雲、そして寸詰まりの人物たちの源にはルソーがいたのかもしれませんが。

ところで、この楽しい《夏山》を描いた年の8月に古賀は母を亡くし、11月には神経衰弱のため帰郷しています。遡って古賀が1921年に「ウソの画が描きたい。出鱈目の画が」という有名な言葉を記したのは、初めての子を死産した直後の手紙の中でした。古賀にとっての現実と絵の世界に想いを馳せると、作品は一層複雑な表情を見せてくれます。（主任学芸員 深山孝彰）

※ご紹介した所蔵作品《夏山》を、本会報表紙に掲載しました。

■学芸員の横顔

深山孝彰（みやま・たかあき）
愛知県美術館美術課主任学芸員
石川県金沢市生まれ。大学での専門は日本彫刻史（仏像）。1988年から愛知県美術館の開館準備に就く。「戸張孤雁と大正期の彫刻」「川合玉堂展」「中西夏之展」、テーマ展「ふじい忠一」「藤城凡子」などを担当。趣味は音楽鑑賞（所有CD約1700枚）。



○愛知県美術館より○

新館長挨拶／新学芸員紹介

◇ごあいさつ 愛知県美術館長 牧野研一郎

愛知県美術館は1992年の開館以来、浅野徹、長谷川三郎、市川政憲という三代の専門家館長の指導と庇護のもとで着実に歩みを続け、成果をあげてきたといえます。バブル景気による美術作品の高騰という状況の中で新美術館のためのコレクション形成に尽力され、また美術館人のあるべき姿勢を示された浅野館長、バブルの崩壊とそれに続く行財政改革の嵐の中で奮闘された長谷川館長、成熟した市民社会に根差した新しい美術館像を希求するとともに愛知万博の



記念事業に汗を流された市川館長、この三代の館長の愛知県美術館に寄せる情熱と希望を、また時には怒りを間近で見してきました。

日本学術会議が「博物館の危機をのりこえるために」という声明を発表（2007年5月）するほどに、一般的に美術館を取巻く状況には厳しいものがあります。この荒海を乗り越えるための唯一の方策は美術館への市民の支持です。四代目館長としては市民の支持を得られるような美術館運営に微力ですが全力を尽くす所存ですので、友の会の方々のご支援をお願いする次第です。

■館長の横顔

牧野研一郎（まきの・けんいちろう）

団塊世代の末尾に位置する1951年生れの56歳。原産地は三重県尾鷲の漁師町。小学校から大学までは東京暮らし。美術史を少し齧り、大学院を修了するころ公立美術館建設ラッシュに遭遇。長く貧しい大学生生活にピリオドをうち、三重県立美術館の準備室に学芸員としてもぐりこむ。諸般の事情で愛知県新文化会館建設事務局に移籍して20年余。移籍時に木本監督率いる野球部の試合に4番打者・先発ピッチャーとしてデビューを飾るも、監督の期待をおおきく裏切る過去を持つ。性格は大雑把。待望の定年まであと4年。

◇新学芸員より 企画業務課学芸員 中村史子

今年度より、愛知県美術館にてお世話になっています中村と申します。現在は、企画業務課の学芸員として、主に企画展の準備やワークショップなどのイベントを担当しております。まだまだ分からないことも多いのですが、たくさんの方に支えていただきながら、早く一人前の学芸員となれるよう努めているところです。

さて、これまで私は、大学で現代アートや写真について研究してきたのですが、美術館という現場に入って、これまでとは異なる姿勢を作品に対して持てるようになりました。今までは、作品コンセプトや美術の世界における作品の位置づけなどに関心を持って、作品を眺めていたのですが、今は、その作品を運ぶ手段や展示方法、作品の管理方法も同時に考えるようにしています。例えば、巨大な絵画や彫刻作品の中には、大変

な重量を備えたものも少なくはありません。そのような作品を前にすると、これを運んで展示するにはまずは体を鍛えることが必要かな、などと思ってしまう。こうした見方をすることで、作品の背後



に、作品に関わる多くの人たちの努力や試みまで浮かび上がってくるようで、とても面白いです。

友の会の皆様には、色々と未熟な面もある私ですが、様々なかたちでサポートいただければと思います。そして一緒に、美術館をより楽しく魅力的な場にしていきたい、と願っております。

